

〈修士論文要旨〉

グループにおけるスケープゴート現象の 心理力動について

—— 個人のパーソナリティ類型と集団文化の影響に関する実証 ——

岡 島 真 一*

I. 問題

日本において近年、「いじめ」に対する関心が高まっている。いじめとは、imidasによれば、集団関係のなかで立場や力の弱い者をターゲットにして精神的・身体的な攻撃を執拗に加えることをいう。学校でのいじめが問題化するようになったのは1980年代以降である。

文部省の児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議は96年7月に「いじめの問題に対する総合的な取組について」と題する報告を公表し、いじめ対策として、家庭や地域との連携や学校全体での対応の重要性を指摘し、学級編成替えや転校といった措置も必要だと提言した。

当時の文部省、厚生省では、学校集団における「いじめ問題」への対策が議論された。本研究はグループにおけるスケープゴート現象の心理力動に関する実証的研究である。

本論文はまず定義される必要のある4つの根本的な概念から構成される。すなわち、「スケープゴート (scapegoat)」、「スケープゴート現象」、「Bionのグループ理論における基本的概念」、「D-グループ」である。

II. スケープゴート現象における概念

1. スケープゴートの定義

心理学辞典によると「スケープゴートscapegoat」は、贖罪の山羊のこと。転じて、集団が危機に直面したとき、集団内の欲求不満を解消したり他の集団成員が自責の念をまぬがれるための非難・攻撃の対象となる内集団の特定の成員のこと。実際の問題解決から目を逸らすことにつながる。スケープゴートの典型的な例として、経済破綻の危機に直面したドイツで、ナチスが問題のすべてをユダヤ人の国際的陰謀のせいにしてユダヤ人を非難・攻撃したことをあげることができる。Bion (1961) によれば、心理力動的アプローチに賛成しているほとんどの筆者は、スケープゴートが彼(彼女)が所属しているグループの投影した、望まれない側面(衝動、感情、動作、印象など)のための入れ物の役割を演じるという解釈を共有する。スケープゴートの存在は、それに対してグループの攻撃性を向けることを可能にし、そしてグループの緊張、恐怖、および不安レベルを減少させる。

平成18年度 *社会学研究科社会学専攻(臨床心理学コース)

2. スケープゴート現象の定義

「スケープゴート現象」とは広義の意味ではグループ自体が抱える問題をグループ内の個人あるいはサブグループに身代わりとして押しつけ、結果として根本的な問題解決ができない状況を指す。また集団文化の特徴としては、規則に縛られて個人に自由がないところや、警察や軍隊や政党のような、組織が一体となって敵と戦わなければならないような集団においてスケープゴート現象が起きやすいという経験的な推測がある。しかし、スケープゴート現象が発生する状況を明らかに示す研究はない。

3. Bionのグループ理論における基本的概念

本研究は、グループにおけるスケープゴート現象の心理力動に関する実証的研究である。集団文化の測定にはBionの「基底的理想グループ (basic assumption group)」を用いる。

Bionの基本的な発見は、あらゆるグループ活動には「作動グループ (work group、以下WG)」と「基底的理想グループ (basic assumption group、以下baG)」という対照的な機能的水準が同時に存在するという点である。しかし、ここでの「グループ」という用語は、「特殊な心的活動のみを包含するものであり、その作業に携わる人々を意味するのではない」(Hafsi訳)。

Morenoは、社会の基本的構造を、原子のネットワークとして記述している。更に、Bionも、化学から「原子価valency」という概念を借用し、人間の対人関係や個人とグループとの結合の説明を試みた。Bionは、人間が、原子と同様に原子価を持ち、原子同士のように、その原子価によって結合すると考え、原子価を、「確立した行動パターンを通じて、他者と瞬間的に結合する個人の能力」また「基底的理想を創り出したり、それに基づいて行動したりするためにグループと結合していくための個人の準備状態 (readiness)」(Hafsi訳)と定義している。

4. D-グループ

D-グループの根源はフランス学派 (CEFFRAP) の代表であるAnzieuとその同僚の「groupe de diagnostic」あるいは「診断グループ」にある。HAFSIはその英訳である「diagnostic group」をD-グループと省略して用いた。D-グループは1人のトレーナーと2人の観察者からなる精神分析的指向のTグループである (Anzieu, 1984)。

Ⅷ. 仮説

仮説1：スケープゴート現象が一番発生しやすいのは、闘争基底的理想グループにおいてであろう。

仮説2：グループにおいてスケープゴートになりやすいのは支配的原子価が闘争原子価以外の人であろう。

IV. 方法

1. D-グループの実施

参加者は、男女の区別なく、10から12名ずつに振り分けられ、8つのグループ（グループ1～グループ8）が構成された。

2. アンケートの実施

D-グループが始まる前に、機会を設け、メンバーの原子価を測定するための尺度VATを実施した。これによってメンバーのパーソナリティ類型が測定された。そして、セッション終了ごとに3つの尺度を実施した。1つ目にグループの基底的想定をはかるためにbaG尺度（baGS）、二つ目にグループにおけるスケープゴート測定尺度、三つ目にソシオメトリックテストを実施した。

V. 結果

スケープゴート測定尺度8項目に対して、主因子法による因子分析（varimax回転）を行い2つの因子が抽出された。因子1は、項目1「グループに貢献しようとしなかった。」項目4「積極的に発言しなかった。」項目5「メンバーの話を聴こうとしなかった。」項目6「みんなと仲良くなろうとしなかった。」項目9「グループと無関係でいようとしていた。」である。これらの項目は、本人がグループとどのように関わろうとしていたのかを評価している。これに基づき、因子1を「グループへの否定的関係性の評価」と名づけた。因子2は、項目2「グループの雰囲気悪くしていた。」項目3「退屈そうだった。」項目7「批判的な印象があった。」である。この項目は、本人のグループへの関わり方とは関係なく、本人の否定的な印象を評価している。このことから、因子2を「グループへの否定的印象の評価」と名づけた。この二つの因子に基づき、グループにおいてもっとも否定的に評価されていた人物をスケープゴートとした。

人間が集団を作った時には、スケープゴート現象は不可避のことだと考えられている。その際に、現在起こっているのは、スケープゴート現象だと指摘し、その原因を探索することで、スケープゴート現象をした側も受けた側も、人間的に発達できると考えられている。いじめをなくそうとか、あってはならないことだと強調しすぎると、教師も子どももそれを隠そうとし、親もなるべくそれを見ないようにするだろう。グループは常に基底的な想定を有し、闘争基底的な想定グループの発生は不可避である。スケープゴート現象の発生が不可避であることを受け入れ、みんなが共有して、起こった時に対処できるようにするように方向付けられるべきであると考えられる。